

北海道の島旅 2024



2024年6月

旅のチカラ研究所 植木圭二

6月の後半、北海道の離島に友人と行ってきた。北海道民もあまり知らない天売島と焼尻島、そして奥尻島を巡ってきた。どの島も自然がいっぱいで人々との交流も面白かった。

第一章 天売・焼尻

■初日から欠航

初夏の北海道、気温は23°C、風がやや強いが私は気持ち良くレンタカーを走らせている。行先は日本海に面した羽幌町で、札幌と稚内のほぼ中間にある。その羽幌から約28km沖合に最初の目的地の天売島がある。

ハンドルを握る私の隣でナビをしているのがノブさん、彼とは約2カ月前にも沖縄の北大東島と南大東島と一緒にいった。私のサラリーマン時代の同僚で、昔から離島などの辺りな場所に一緒に行く、いわば“秘島ハンター”だ。(旅行記「沖縄の旅2024」参照)

白波が立つ日本海を見ながら海岸沿いの道を進み、羽幌港にやって来る。ターミナルビルに入りチケットを買おうとすると、まさかのフェリー欠航の放送が流れる。

島の旅ではよくあることだと頭では理解していても、初日から欠航ではさすがに出鼻をくじかれて落胆する。



【北海道の地図 天売島、焼尻島、奥尻島】

気を取り直して、ノブさんは本日泊まる予定だった天売島の宿にキャンセルの電話を掛け、私は本日泊まる羽幌付近の宿を探す。良さそうな宿は既に満室になっている。仕方ないので観光協会のパンフレットの上から順に電話を掛けまくり、何とか予約できた。

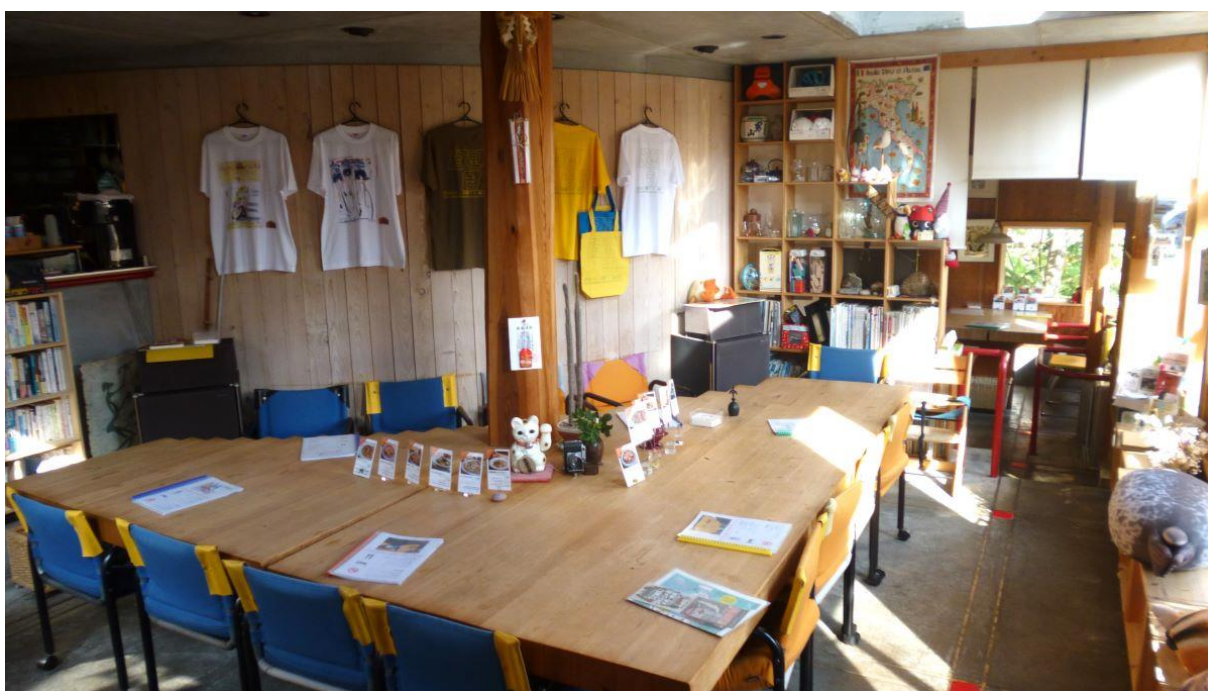
宿に入るにはまだ早く、港近くの「羽幌温泉サンセットプラザ」で立ち寄り湯をする。私はこの施設に過去にも来たことがあるような気がするが思い出せない。

ところが大浴場に入って記憶がよみがえる。最近の私は宿の名前や外観は覚えていなくても入浴して思い出すことが多い。確かこの宿は温泉も食事も素晴らしかったことを思い出したが、残念ながら今日は満室になっている。(宿の詳細は旅行記「冬の道北の旅 2022」参照)

■ライダーズハウス

急遽泊まることになった宿「カフェ&イン吉里吉里（きりきり）」に到着する。名前も不思議な宿だが、建物も不思議な造りをしている。

2階建ての赤茶色の母屋は手作り感がありオリジナリティに富んでいる。その1階は食堂兼リビングルームで、三角形の大きなテーブルが置かれている。天井が高く採光抜群で非常に明るい。部屋の隅には高級オーディオがさりげなく置かれていて、軽音楽が流れている。



【カフェ&イン吉里吉里の食堂兼リビングルーム】

私たちが泊まる部屋は母屋と中庭を挟んだ離れで、緑色の外壁塗装がくすんで苔が生えているように見える。中庭にはバイクが数台置かれており、宿泊客らしき2人がバイクの手入れをしている。この宿はライダーズハウスでバイク乗りが多く泊まる宿らしい。

部屋も手作り感満載で、木造で洒落た造りをしている。ベッド2台と小さなテーブル、そしてソファだけの小さな部屋には採光窓はあるが外は見えない。洗面とトイレは離れにあるが、シャワーは母屋にしかない。ただ立ち寄り湯をしてきた私たちにその必要はない。

部屋に入り、セイコマートで買ったサッポロクラシックビールを飲む。このビールを飲むと北海道に来たという実感が湧いてくる。私たちはビールを飲みながらテレビも何もない部屋でゆっくりとくつろぎの時間を過ごす。

「この何もない時間がたまらなく良い」とノブさんは言っている。私もこの“ゆったり感”が好きで、黄昏時に私たちも一緒にたそがれている。

偶然選んだ宿だが何となく気に入っている。旅は期待し過ぎると落胆することが多いが、偶然の感動は何倍にも増幅される。私の持論の「期待と落胆、偶然と感動」を実感する。

夕食の時間になり食堂に行くと、各所で旅の話とバイクの話で盛り上がっていく。

私たちが天売に行こうとしたがフェリーが欠航になった話をする、すぐに天売の情報を教えてくれる人がある。その彼は全国の空港をバイクで巡る旅をしたことがあって、天売と焼尻には空港はないが、利尻と礼文に行ったついでに天売・焼尻にも行ったという。

またある人は家が延命寺という寺をやっている、日本国中に300近くある延命寺を巡っているという。

旅には何かテーマがあるといい。それを求めて旅をしていると、偶然の出会いもまた楽しい。

そんな話をしていると外国人男性2人がバイクで中庭に現れる。対応に出た宿の主人の様子から察すると予約なしの“飛び込み”らしい。

私も興味本位で中庭に出て、つたない英語で話をする。

2人は50代に見える。バイクは、何とEUナンバーになっている。EUの国旗の12個の星の下にDの文字があるので、私は「デンマークから来たの？」と聞くと、彼らはドイツから来たと言っている。私は「ドイツはGermanyだからGでしょう」と聞き返すと、彼らは「DeutschlandなのでDだ、Germanyは英語だ」と反論してくる。

これは日本をNipponと呼ぶかJapanと呼ぶかのようなものと理解する。ドイツ人にそんなこだわりがあったことを、私は今初めて知ることになる。

ドイツを出て何日経ったかを聞くと、100日と返ってくる。

それにしてもドイツからバイクで来ることも、さらにEUナンバーで日本国内を走れることも驚くことばかりだ。

ドイツ人たちが、部屋に荷物を置きシャワーを浴びて食堂に入ってきた。

日本人の誰かが「どのルートでドイツから走って来たか？」を聞くと、ドイツ人は「船便でバイクを送って日本で受け取った」と言う。すると別の誰かが「いくらかった？」と聞くと、「350ドル」と言う。今のレートで5~6万円、その安さに日本人一同驚いている。

その反応にドイツ人は「バイクではなく、部品だと安い」と言う。つまりバイクを分解して部品にして船便で送って日本で組み立てたことになる。



【EUドイツのナンバープレート】

私はドイツ人のこの姿勢や技術力に驚き、やはりドイツ人は凄いと改めて感じる。そういえば日本は昨年 GDP でドイツに抜かれて世界第 4 位になった。それは十分に理解できる。

■天売島

翌朝、フェリーの運航を確認して宿を出る。港にレンタカーを止め置き、船に乗り込む。昨日の欠航が影響しているのだろう、船内は混雑している。昨日に比べて風はおさまっているものの、489 トンの小さな船なのでかなり揺れる。天売までの 1 時間 40 分の船旅は横になって過ごす。

天売は周囲 12km の小さな島なので、私たちは歩いて島内一周に出発する。

巖島神社という神社があって祭をしている。巖島神社は全国に約 500 社あり、広島宮島の巖島神社が総本社になっている。海の守護神として宗像 3 女神を祀っているから、この巖島神社も海の安全を祈念して建立されたのだろう。私たちも今回の旅の安全祈願をする。

天売高等学校という定時制高校がある。人口 250 人程の島に高校があることに驚いてしまう。近くにいた地元の人に訊ねると、今年は 7 人入学したという。



【天売高等学校】

この島は鳥の楽園として有名で、珍しい海鳥が多く生息している。

それゆえだろうか、「天売海鳥研究室」と看板が掲げられている家がある。一見すると普通の民家で、ちょうど 2 人の若い学生風の娘が玄関から出てきたので話を聞いてみると、この建物は北海道大学の施設で学生が泊り込みで海鳥の生態を研究しているという。つまりこの 2 人は大学生で 1 人は北海道大学、もう 1 人は鹿児島大学の学生だと言っている。

私が「オロロン鳥がこの島にいると聞いたけど、見ることができますか？」と聞くと、「数日前に赤岩展望台で見たという情報があります」と言っている。赤岩展望台はこれから私たちが行くルートに入っている。

オロロン鳥は正式名称「ウミガラス」で、オロロン〜♪という鳴き声からそう呼ばれている。絶滅危惧種で、日本ではこの天売島にしか生息していない。



【オロロン鳥の写真】

私たちが秘島ハンターだと自己紹介すると、鹿児島大学の彼女が「鹿児島県の甑島（こしきじま）に行ったことがありますか？」と聞いてくる。私は「まだ行っていませんので、今度行きたいね」と答えると、彼女は「そうですか」とさりげない。

その言葉には、秘島ハンターを名乗るなら甑島は行ってなくちゃね、というニュアンスを感じる。私の秘島ハンター魂に火がついてしまい、次の島旅の行先が決まる。

大学生たちと別れてさらに歩いていくと、なだらかながら坂道が続く。それなりに登ってきたが島の最高標高 184m までは至っていない。断崖絶壁になると天敵が近づき難いので海鳥の生息には適していると、先ほどの女子大生から聞いていた。

「黒崎海岸」にやってくる。オロロン鳥（ウミガラス）ではなく、ウミネコがたくさんいる。その数は数千羽、いや数万羽いるだろうか。私もノブさんもこのとんでもない数のウミネコを見て、驚くばかりだ。

羽根が白くない産毛（うぶげ）の鳥がいる。これはウミネコのひな鳥だろう。



【天売島の黒崎海岸のウミネコ 中央右にひな鳥がいる】

まだ飛ぶことができないひな鳥を狙う天敵がいる。海鳥にとって天敵は哺乳類で、この島では野良猫が問題だった。“問題だった”という過去形を使ったのは、島民たちは野良猫を殺処分せずに飼猫化や去勢して一掃した。その結果、天売は海鳥の楽園になった。

野良猫はいなくなったが、この島には人間には厄介な爬虫類がいる。道路のあちらこちらには「マムシ注意」の看板が出ている。島一周道路は舗装されているので問題ないが、舗装が切れた道端の草むらが危ないらしい。それでも熊がいないので安心できる。

オロロン鳥が目撃されたという赤岩展望台にやって来る。断崖絶壁のはずだが、霧が立ち込めており、オロロン鳥どころか 10m 先の灯台さえも見えない。

その後も濃霧が続くが、観音岬園地に出くると霧が少し晴れてくる。

徒歩での島内一周は約 3 時間で終わりになり、再びフェリーターミナルに戻り、焼尻に向かって船に乗る。歩数計を見ると 22506 歩になっていた。



【観音岬園地から見る断崖】

■ゲストハウス

焼尻では若い夫婦が営むゲストハウス「やすんでいけ」という宿に泊まる。もとは古い家のようなのだが小綺麗に改装している。

玄関には「北の国から」や「Dr.コトー診療所」で有名な俳優の吉岡秀隆のサイン色紙が飾ってある。北海道と孤島の組み合わせからだろうか、この島に来てこの宿に泊まったという。そして本日私とノブさんが泊まる部屋に吉岡秀隆も泊まったというから驚きだ。受付をしてくれた女将に「私達もVIP待遇ですか？」と聞く、彼女はにっこりと笑っている。

吉岡秀隆が泊まった部屋に入ると、部屋の隅に2段ベッドがあるだけの至ってシンプルな部屋だが、VIP待遇ということで気分は上々だ。

女将と話をする。旦那は島旅が大好きで、若いころから島で宿を開くことを夢にしていた。そしてこの焼尻で古民家を自分たちの手で改装して、この宿を開業させた。地域おこし協力隊にも属していたというから島を愛してやまないのだろう。女将も仕事で焼尻島を訪れたことをきっかけに島の生活に惚れて移住を決意したという。

島大好き夫婦の新婚旅行は伊豆諸島最南の青ヶ島だった。青ヶ島は八丈島の南約80kmにある孤島で私も行ったことがあるが、まるで人間の上陸を拒んでいる島で簡単に行けない、そして簡単には帰れない。夫婦も帰れずに4日間も泊まってきたという。(青ヶ島は旅行記「伊豆諸島の旅Ⅱ2022」と「御蔵島と青ヶ島2023」参照)

この宿はゲストハウスということで普通の民宿ではない。VIP待遇(?)の私達たちは別としてドミトリー(相部屋)で、どちらかと言うとユースホステルに近い。宿泊者自らベッドメイクをして、食事の配膳も手伝い、食べ終わった食器も自分たちで洗う。

夕食後は食堂が宿泊者たちの語らいの場になる。そして今夜の宿泊客たちはすぐに打ち解けて旅の話で盛り上がる。やはり辺境の島にやって来る人たちは旅の強者(つわもの)が多い。



【やすんでいけの玄関と看板】



【食後の語らいの場】

本日泊まっている1人旅の女性は医療関係者ということで職場を転々として旅をしている。今は北海道に住んでいるから利尻と礼文そして焼尻と天売に来たという。宿泊はマイカーの車中泊で、焼尻に渡るため羽幌に車を置いてきたので、今回の旅では初めてベッドで寝るという。北海道の次は外国に行き、友人宅に長期滞在するというから飛んでいる女性だ。

そんな人たちと旅談議から地域のグルメの話になり、何故かソースかつ丼の話題になる。その話題に異常に反応したのが宿の主人でソースかつ丼談議に夫婦して参戦してくる。ソースかつ丼評論家を自負する私も参戦し、夕食後の語らいはソースかつ丼で盛り上がる。

羽幌のライダーズハウスもそうだったが、辺境の地に来る旅行者は経験も豊富で、独特のポリシーや夢を持っている。それらを共有できる場所や仲間を求めて旅をしている。

■焼尻島一周

翌日、焼尻島一周に出かける。焼尻は天売と同サイズなので3時間で回る予定にしている。

最高標高は天売の184mに対して焼尻は94mということで、焼尻の方がかなり低い。そのために断崖絶壁がなく海鳥もそんなに多くない。その代わりに牧草地帯が広がっており、日本では珍しい羊サフォークを放牧している。



【焼尻の道路】

なぜ焼尻で羊なのか。やぎしりならば“山羊”のはずだが、おっと失礼、漢字が違うか。

冗談はさておき、羊を飼った理由は 1962 年に漁業の不漁対策が発端で、後にサフォーク 100 頭をオーストラリアから輸入した。そしてサフォーク種純潔生産基地北海道第 1 号の指定を受け、今では島の貴重な観光資源になっている。



【放牧中のサフォークの群れ】

このサフォークの肉が希少で美味しいという事で、大変人気があり滅多に食べることができないが、フェリーターミナルの近くの食堂で食べられると宿の主人が教えてくれた。

島の西端の「鷹の巣園地」から約 4km 先の天売島が見える。

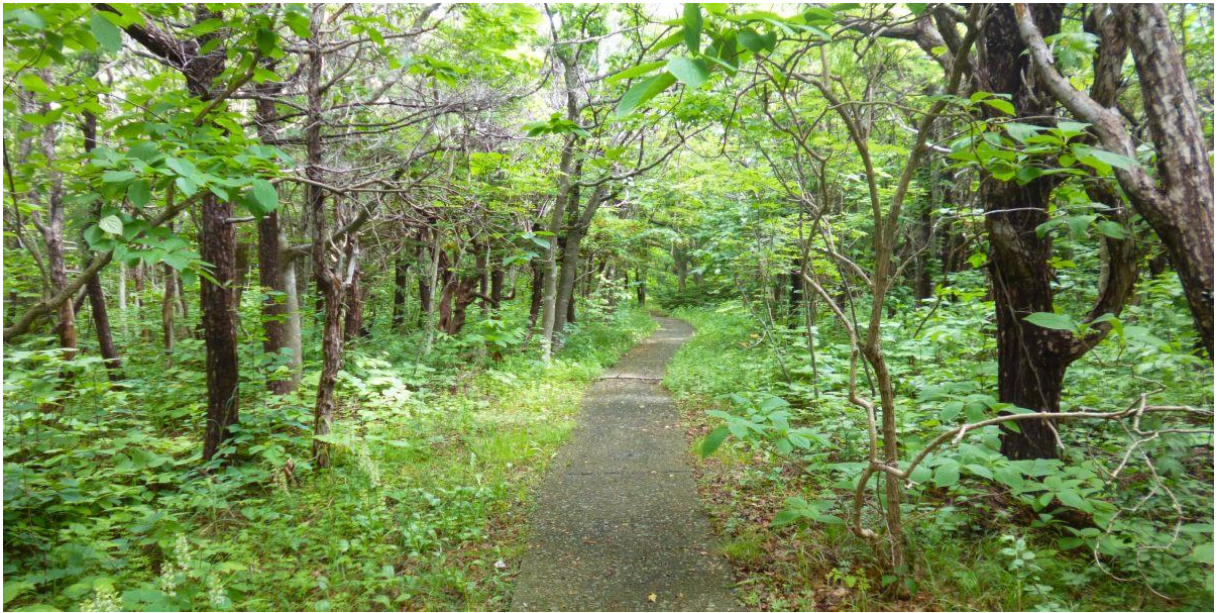
そこから海岸線をしばらく歩くと白浜キャンプ場があり、ここからも天売島が見える。テントが 1 張はられており、1 人用なのでソロキャンプだろう。キャンプ 350 泊経験の私にしてもこのような風光明媚なテントサイトは珍しい。夜は何も灯りが無いから満天の星空が広がり、波の音だけが聞こえてくるのだろう。この島にも熊がいないので安心して眠れるが、マムシは夜行性なのでトイレに行く時が要注意だろう。



【白浜キャンプ場とテント 海の向こうに天売島が見える】

キャンプ場から内陸に入ると、再び牧草地があり森になる。その森にはコンクリート製の遊歩道が整備されており、これもマムシ対策には好都合で、清々しい緑の中を快適に歩くことができる。

森があるので昆虫も多く生息しており、フェリーターミナルで物々しい恰好をしたおじさんがいたので、その理由を聞いたら昆虫の標本集めにいくといていた。彼は昆虫の専門家らしく、焼尻は昆虫の宝庫だと言っていた。



【ウグイス谷付近の森の中】

港に戻ってくると、古くて立派な洋風の木造建築物が目に入る。「羽幌町焼尻郷土館」という建物で、1900年建造の名家の旧小納（こな）家を資料館として開放している。

小納家は漁業のほか呉服商や雑貨商を営み、郵便局と電話局も併設していた。そのため館内には郵便局と電話局の部屋があり、当時の電話交換機が展示されている。

1900年という今から124年前で、こんな北の最果ての離島にこのような豪華な家があったことに驚き、そして何故か感動している自分に気が付く。



【羽幌町焼尻郷土館（旧小納家）】

予定通り約3時間で島内一周を終え、歩数計を見ると21461歩になっていた。

■焼尻島の憂鬱

フェリーターミナルの島民やゲストハウスで聞いた話では、島での冬の生活は大変だという。冬の日本海は荒れてフェリーの欠航も増え、観光客も来なくなり、漁に出る回数も減り、農作物もとれない。収入が減り生活も苦しくなるのに暖房費がかかり雪下ろしも必要になる。

そもそも日本の離島は南には多いが北は少ない。そのため北国の離島の冬については情報が極めて少ない。もちろん私は経験したことがないが、想像するだけでその大変さが理解できる。

季節とは関係ないが、天売と焼尻には役場がない。どういうことかと言うと、天売も焼尻もフェリーが出ている羽幌町に属しており、島にはその出先機関しかなく町役場は羽幌町にある。

島はその独自性から1つの自治体で運営するのが好ましい。ゲストハウスの夫婦が新婚旅行で行った東京都の青ヶ島は人口170人なのに1つの村で村役場がある。あるいは私たちが2カ月前に訪れた沖縄の北大東島も南大東島も別々の村で、それぞれに村役場がある。

逆の見方をすると羽幌町という小さな町が2島を抱えている。

2022年の統計では羽幌町全体で6434人しか住んでいない。そして天売258人、焼尻171人なので合わせても羽幌町全体の7%にも満たない。国からも補助があるだろうが、過疎化が進む町では予算配分にも限界がある。その配分も人口に準じるとすれば、焼尻は分が悪いだろう。

さらに「有人国境離島法」という法律がある。それは国境になっている離島を衰退させないために国が支援することを定めている。本土から遠い天売は国境離島で、焼尻は国境離島ではないと焼尻島民は嘆いていた。

ただし調べてみると焼尻にも適用されているようで、被害者意識があるのかもしれない。

第二章 奥尻島

■札幌

次の目的地の奥尻島まで距離があるので、札幌の「アパホテル&リゾート札幌」に泊まる。この宿はビジネスホテルでなくリゾートホテルなので豪華な造りをしている。

そんな豪華ホテルに香川県の高校生が修学旅行で泊まっている。洋室のツインルームでは枕投げも出来ないだろうが、今の高校生はWi-Fiさえあれば良いのかもしれない。

札幌と言えばジンギスカン鍋だが、私は1カ月前に盛岡のジンギスカン料理店で食べた“ラム生肩ロース肉”と“スーパーレアのラムヒレ肉”が忘れられずにいた。そして今回はその姉妹店の「羊屋えびす札幌別邸」を訪れる。

盛岡と同じ肉を食べてから、外側からゆっくり焼いてスライスしたローストラムを食す。これが実に美味い。そして冷凍の羊肉をロール状にして輪切りにしたマトンロールもいただく。これは良く見かけるラムロールではなくマトンロールなのでかなり大きい。



【大根おろしを盛り付けたローストラム】



【マトンロール】

生まれも育ちも北海道という店主に、天売と焼尻のことを聞くが知らなかった。この2島は意

外に認知度が低いことに驚く。

ホテルのフロントで美味しいラーメン屋を聞くと、すすきののラーメン店「輝風（きふ）」を教えてください。私たちが来店した時はそれほどでもなかったが、みるみるうちに行列が長くなる盛況ぶりに驚く。生姜味が効いた味噌ラーメンが評判の理由らしい。壁いっぱい多くの有名人のサインが飾ってある。

■奥尻島一周

札幌から江差追分で有名な江差にやって来る。レンタカーを止め置き、約 60km 離れた奥尻島に向かうフェリーに乗る。海は穏やかで、快適な 2 時間の船旅になる。

奥尻は人口 2236 人、面積は焼尻の 27 倍もある。もちろん奥尻町役場もある。

島一周は約 65km ということで歩くには無理があり、レンタカーを借り島一周のドライブに出掛ける。レンタカーは 4 時間 4000 円だったが、錆が出ているからと言って 1000 円引いてくれる。予期せぬこんな心配りは実にありがたい。

島の北端にある「賽の河原」にやって来る。仏教でいう“賽の河原”とは人が死んで渡る三途の川の手前にある河原で、塔婆があり石が積まれていることで知られている。

ここにも塔婆があつて石が積まれており、地蔵が立っている。元々は海難事故の慰霊の場所らしいが、1993 年発生の北海道南西沖地震で多くの死者と行方不明者を出したのでその慰霊が主になっているようだ。



【賽の河原】

賽の河原の近くに食堂兼土産物店がある。店番をしているおばさんを冷やかして、近くの観光名所を聞くと、「自然だけ、何もないよ」と実にそっけない。

店内に貼ってある観光ポスターに書かれたキャッチコピーがそのことを単的に表している。

「島の人には『な～んもない！』って言う。訪れた人は『これ以上いらない！』って言う」、何となく島のイメージが湧いてくる。

廃校になった小学校の校舎を利用した「稲穂ふれあい研修センター 歴史民俗資料展示室」があ

る。焼尻の焼尻郷土館のようにかつて繁栄していた頃のこの島の生活が見てとれる。

無人と思いきや案内してくれる人がいたので話を聞いてみる。

島内からは約 8000 年前の土器や石器が数多く発見されており、石組炉も出土した立派な縄文遺跡があるという。2021 年に世界遺産登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産には入っていないが、私が思うにその一連のものだろう。

その世界遺産の登録理由（抜粋）を記しておこう。

『豊かな森林・水産資源に恵まれ、縄文人は農耕社会に移行することなく、環境の変化に適応しながら狩猟・漁労・採集を基盤とした生活を継続した。土器を使用し、居住地や祭祀場を形成し、複雑な精神文化を発展させていた。墓を作り、祭祀のための盛土、環状列石を創造し、社会的つながりもあった』、この文章で大昔に奥尻で暮らした縄文人の生活が想像できる。

「宮津弁天宮」という神社がある。陸地から突き出た島のような急峻な小山で、頂上には神社が建っている。この神社を参拝するには急峻な階段を降りて、再び登らないと行けない。その階段が 164 段もあり、今回は直接の参拝を諦めて遥拝で済ませる。



【宮津弁天宮】

標高 369m「球島山展望台」にやって来る。ここは“何もない”という島を見渡せる観光名所だが、残念ながら霧で何も見えない。天売もそうだったが、島の標高の高い部分は霧が発生しやすい。それでも低地に降りると晴れているから、島ならではの現象なのだろう。

「北追岬公園」には整備された立派なパークゴルフ場と眺めの良いキャンプ場がある。

キャンプ場にはバイクで来た旅人がテントを張っている。ここは島の西側なので日本海に沈む夕日を見ながらキャンプを楽しめる。焼尻のキャンプ場同様に羨ましい限りだ。

そういえば「何もないよ」と言っていた土産物屋のお婆さんは、奥尻には熊もキタキツネもいないと言っていたから、安心してキャンプできる。



【北追岬公園のキャンプ場】

無縁島という島があり、その対岸の道端には津波痕跡地点という看板が立っている。

看板には「1993年北海道南西沖地震で奥尻島は壊滅的被害を受けた。特に津波は時速500kmという速さで本島を襲い、本地点は津波痕跡高23.3mが示された」と書かれている。

看板の遥か上に23.3m地点の場所が示されている。それにしても時速500kmと言えぱりニアモーターカーと同じだ。津波はそんなに速いのか。



【津波痕跡看板 赤丸が23.3m地点】

「うにまる公園」という公園にあるウニのモニュメントが面白い。奥尻名産のキタムラサキウニを模して120本のトゲが夜にはライトアップされる。

同じ公園内には奥尻出身の元プロ役選手の佐藤義則野球展示室という立派な建物もある。高台に建つ3階建ての1階はほぼ空洞で、屋上には展望台もあるから津波の避難施設を兼ねているのだろう。



【ウニのモニュメント】



【佐藤義則野球展示室】

南の青苗地区には地震の被害者の大きな慰霊モニュメント「時空翔」があり、私たちはその前でそっと手を合わせる。

港近くの観光名所「鍋釣岩」を見物する。この岩が奥尻のポスターには必ず出てくるもので、意外に大きな岩で夜間のライトアップ設備もある。



【時空翔】



【鍋釣岩】

■抜群の食事

島内を一周して今宵の宿「トラベルハウス思い出」にチェックインする。この宿は秋篠宮夫妻が宿泊したということで、おそらく島内では一番大きく人気の宿なのだろう。

人気の宿だけあって夕食に出てきた料理が凄い。ウニ、ヒラメの刺身、みずだこ、タナゴの焼き魚、焼きイカ、ホヤとナマコもある。もちろん島内でとれた新鮮なものばかりだ

ウニについては1週間前に電話で宿の女将に確認しており、女将は「奥尻は何と云ってもウニですからね、ただウニのシーズンは7月からなので6月はちょっと難しいかも・・・」と云っていた。しかし嬉しいことに女将が何とかしてくれたようだ。



【トラベルハウス思い出の夕食】

【三平汁】

最後の汁物には、塩漬けの魚を野菜と煮込んだ北海道の名物料理「三平汁」が出てくる。これもいい塩味で実に美味しい。

今では北海道の定番料理になっている三平汁は奥尻が発祥の地らしい。島に流れ着いた松前藩主に島民の三平が御馳走したので三平汁と呼ばれるようになったという伝承がある。

三平汁が出た後に、女将が「今、イカが手に入ったけれど食べる？」と聞いてきた。私たちは「もう腹いっぱい」と答えると、「じゃあ、明日の朝ね」と言って夕食が終わる。



翌日の朝食には昨晚食べられなかったイカの刺身が出てきた。それも少量ではなく、結構な量が出てきた。そして生姜醤油で食べると、これがまた美味しい。



【トラベルハウス思い出の朝食 左手前がイカそうめん】

■島民本位

朝 7 時発のフェリーで島を離れる。実はこのフェリーは私たちが昨日乗って来たフェリーで、島の港で一晩停泊していた。

一般的に船や飛行機は島側ではなく本土側に置かれるが、このフェリーは奥尻島に置かれており、運航ダイヤからすればこれが定位置になっている。

夏の観光シーズンは 1 日 2 往復になるが、今は 6 月なので 1 日 1 往復になっている。船が島にあるということは、1 往復ダイヤの場合でも島を朝出てその船が夕方までに戻ってくる。そのため本土の病院に通う場合や午前中で終わる仕事ならば島民は日帰りでも本土に行ける。逆に本土側に船があると、観光客は日帰りも可能になるが、島民は日帰りできない。

他の島にはない島民本位の姿勢が見て取れる。やはり町役場が島にあるからで、対岸の江差町とは対等の関係だからだろうか。

ついでに書くと飛行場も島内にあるので、飛行機での来島もできる。

■江差

江差港に戻り、港の見える高台に建てられた西洋建築「江差町郷土資料館」を訪れる。郷土資料館なので江差の歴史文化を知る展示があり、2 階のバルコニーからは江差の街並みを一望できる。

この建物は 1887 年に檜山郡と爾志（にし）郡を管轄する郡役所として建てられた。その後は江差警察署や江差町役場分庁舎などに使われ、現在では北海道内に唯一残る郡役所建物で、北海道の有形文化財に指定されている。

壁や天井には、昔の布クロスを復元している。華美ではなく、シックで上品な感じがする。これを見る限り、経済的繁栄だけでなく文化的繁栄もかなりのものだったと想像できる。

警察署として使われていたので留置所も復元しており、意外に楽しめる。

この資料館に至る道は旧中村家住宅や江差町会所会館があって、古い町並みを味わえる良い雰囲気になっている。ニシン漁と北前船による海上交易で栄え、むかしの北海道を代表する港街を感じさせてくれる。



【江差町郷土資料館】



【江差の古い街並み】

江差には1936年から木古内駅から鉄道が延びていた。鉄道は2014年に廃線になり、今はアクセスがあまり良くない。そのため観光客が少なく、かえって落ち着ける港街になっている。

新幹線の新函館北斗駅からバスで1時間30分と近い、この街は案外お勧めかもしれない。

■旅の記録

実施は2024年6月17日（月）～6月21日（金）の4泊5日、その行程を示す。

- ・1日目 6時45分羽田空港発のスカイマーク便で8時20分新千歳空港に到着、レンタカーは予約した軽自動車ではなくノートeパワーに無償変更され、栗山町の栗の樹ファームに立ち寄るが閉鎖、羽幌港に12時30分着羽幌から天売・焼尻行のフェリー欠航で、セイコマートでおにぎり購入し昼食「羽幌温泉サンセットプラザ」で立ち寄り湯、16時「カフェ&イン吉里吉里」にチェックインして夕食
- ・2日目 8時に宿を出発、8時30分フェリー乗船、10時10分天売島着、天売島を時計回りに徒歩で一周、「黒崎海岸」、「赤岩展望台」、「観音崎展望台」を見物、「海の宇宙館」入館、15時50分にフェリー乗船し16時15分焼尻島着ゲストハウス「やすんでけ」チェックイン、宿で夕食
- ・3日目 7時30分に宿を出発、徒歩で中央の森を抜けて島の反対側の「鷹の巣園地」、「白浜キャンプ場」、「ウグイス谷」を通って、「焼尻郷土館」見学、11時10分発のフェリー乗船し12時10分羽幌着、札幌へ「とままえ温泉ふわっと」のレストランでエビカツバーガーの昼食、14時に「アパホテル&リゾート札幌」チェックイン、送迎バスですすきのへ行きジンギスカン「羊屋えびす別邸」、ラーメン屋「輝風（きふ）」で夕食、
- ・4日目 7時に宿を出て、江差港フェリーターミナルに着き、13時発フェリーに乗船、

- 船の売店でパンを買い昼食、14時10分奥尻港着、
 レンタカーを借り「賽の河原」、「稲穂ふれあい研修センター 歴史民俗資料展示室」、
 「宮津弁天宮」、「球島山展望台」、「北迫岬公園」、西海岸の奇岩を見ながら南下、
 「時空翔」、「うにまる公園」、「鍋釣岩」を見物し、島内ほぼ一周、
 奥尻島のレンタカー走行距離 87km、「トラベルハウス思い出」チェックイン、
- ・ 5日目 7時に発からフェリーに乗船し9時10分江差港着、「江差町郷土資料館」見学
 新千歳空港に戻りレンタカー返却、レンタカー走行距離 934km
 昼食兼打上げ、16時15分発のスカイマーク便で帰宅

費用は1人当たり約11万円、半分以上は交通費になっている。詳細は以下に示す。

- ・ 交通費 60307円

飛行機	20680円	(羽田-新千歳往復スカイマーク便)
レンタカー	14850円	(新千歳空港で5日間借りた1台29700円の1/2)
同ガソリン代	4178円	(1台分8356円の1/2)
高速道路	5930円	(1台分11860円の1/2)
レンタカー	1650円	(奥尻島で4時間借りた1台3300円の1/2)
同ガソリン代	279円	(1台分558円の1/2)
天売焼尻フェリー	4660円	(羽幌→天売 2330円 天売→焼尻 730円 焼尻→羽幌 1600円 全て2等船室)
奥尻フェリー	6700円	(江差-奥尻往復 2等船室)
電車代	1380円	(自宅～羽田空港往復)
- ・ 宿泊 34025円

カフェ&イン吉里吉里	8325円	(1泊2食付8030円+酒代)
やすんでけ	7800円	(1泊2食付6000円+酒代)
アパホテル&リゾート札幌	7000円	(1泊朝食付)
トラベルハウス思い出	10900円	(1泊2食付8800円+酒代+ウニ代)
- ・ 入場料 1230円

羽幌温泉サンセットプラザ	600円
焼尻郷土館	330円
奥尻歴史民俗資料展示室	0円
江差町郷土資料館	300円
- ・ 飲食費など 13680円

羊屋えびす別邸	5700円	(2人で11400円で1/2)
輝風	980円	
スープカレー+ビール	約4000円	(空港内レストランで打ち上げ)
その他飲食料	約3000円	